

製造業現場における報告業務の実態調査

一報告は「出す」ためのものではなく、「活かす」ためのもの一

本レポートの目的

製造業の現場では、日報・稼働報告・不具合報告など多種多様な報告書が日常的に作成されています。しかし、これらの報告データが実際に業務改善へと活かされているかは十分に検証されていません。本レポートでは、報告作業の負荷実態から、報告の形骸化、情報受信側のペイン、報告と改善活動の接続状況までを定量的に可視化し、「報告する」と「活かす」ことの間にあるギャップを明らかにします。

本調査で明らかにしたかったこと：

- 製造業の現場では、どれだけの報告作業が発生しているのか
- 作成した報告データは、実際に改善活動へ活かされているのか
- 情報を受け取る側にはどんな負担があるのか
- 不具合報告から実際の改善（手順変更）まで、どれだけ時間がかかっているのか



調査概要

調査名 製造業現場における報告業務の実態調査

調査期間 2026年6月24日

調査対象 製造業（従業員100名以上）の現場リーダー・監督職、
生産管理・品質管理・技術部門の管理職・責任者、
工場長・事業所長クラスの現場管理職
300名

調査方法 インターネット調査

Chapter 01

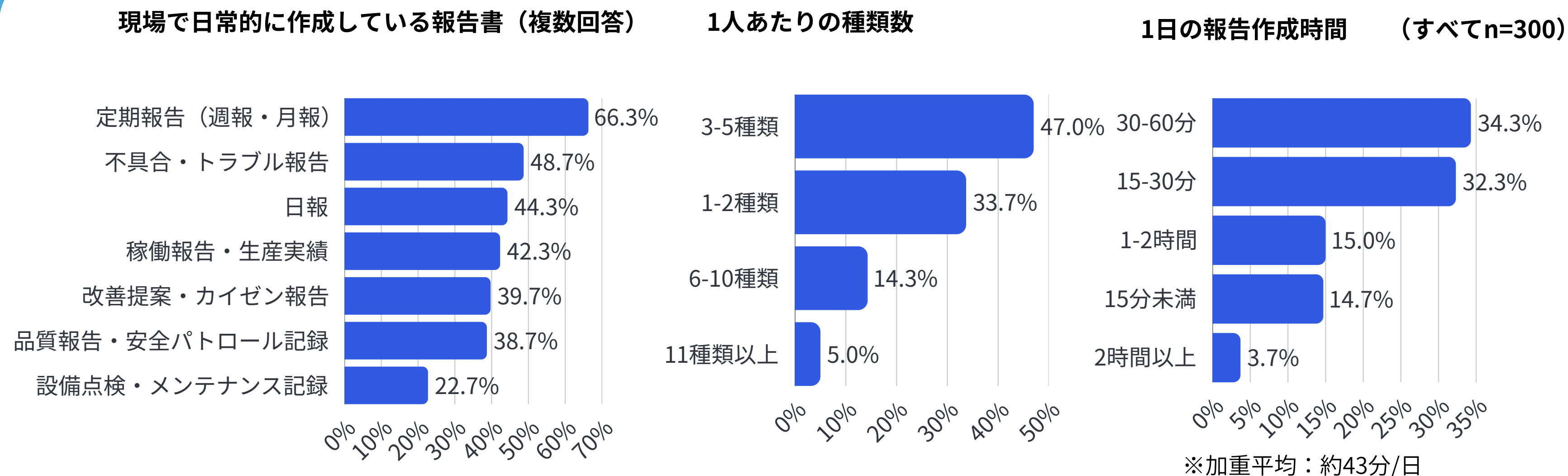
報告作業の負荷実態



現場では日々どれだけの報告書が作られ、
どれだけの時間が費やされているのか。
まずは報告作業そのものの「量」を見ていきます。

| 平均3種類、1日約43分を報告に

日常的に作成している報告書の種類を尋ねたところ「3-5種類」が47.0%と最多で、「6-10種類」（14.3%）「11種類以上」（5.0%）を合わせると6割超が3種類以上を並行して抱えています。1日の報告作成時間は「30-60分」（34.3%）が最多で、平均すると1日あたり約43分、月にして14時間以上を費やされている計算になります。



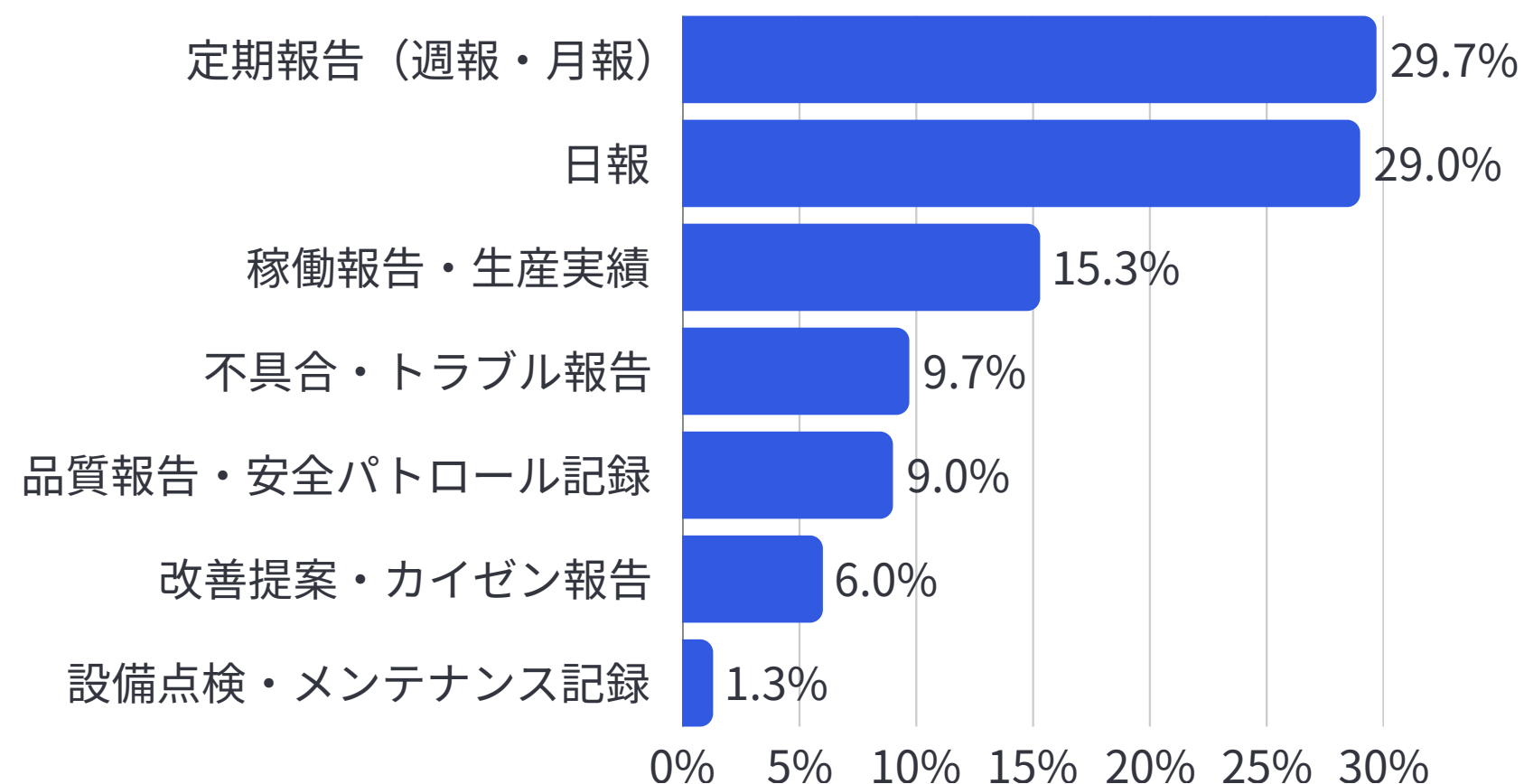
1日43分、月あたり14時間17分を報告書に費やしている

※月20日
営業日にて計算

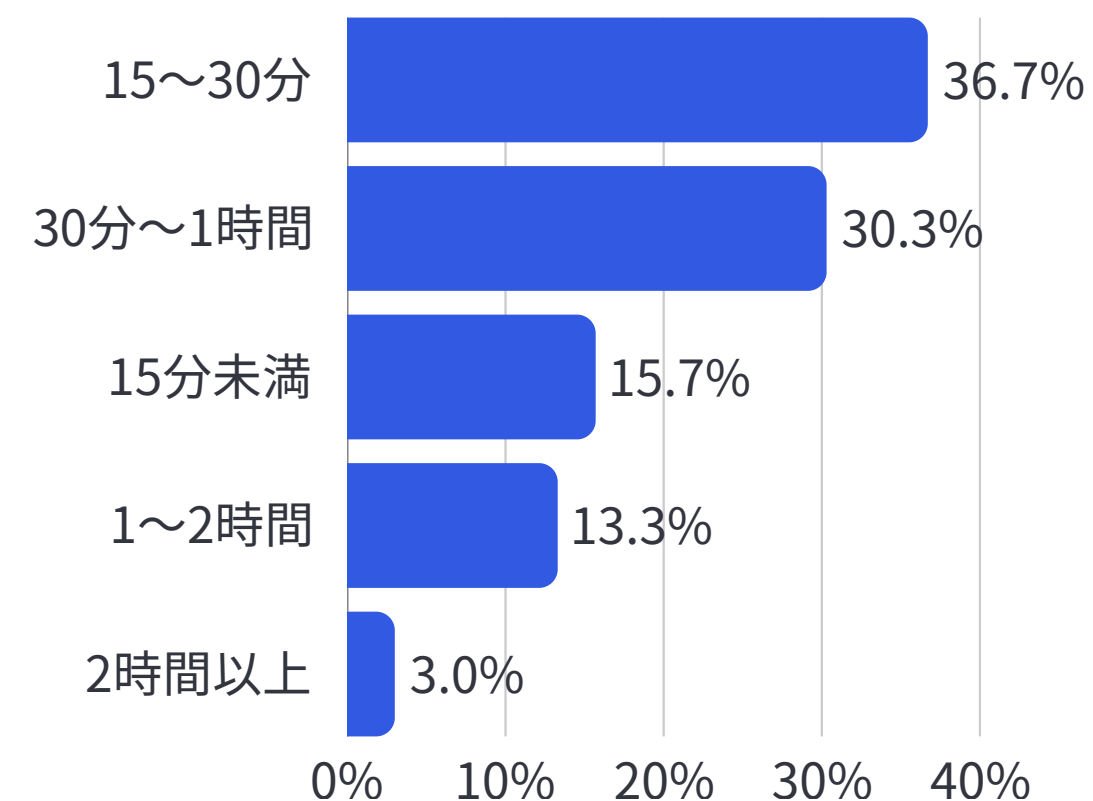
日報1件、承認まで平均40分

最も作成頻度が高い報告書は「定期報告（週報・月報）」（29.7%）と「日報」（29.0%）がほぼ同率でトップでした。日報については、作成開始から上長の確認・承認完了までの時間を尋ねたところ「15～30分」（36.7%）が最多で、加重平均では1件あたり約40分を要しています。

最も頻繁に作成する報告書はどれですか（n=300）



日報1件の作成～確認完了までの時間（n=297）



※加重平均：約40分/件

Chapter 02

報告書の活用実態



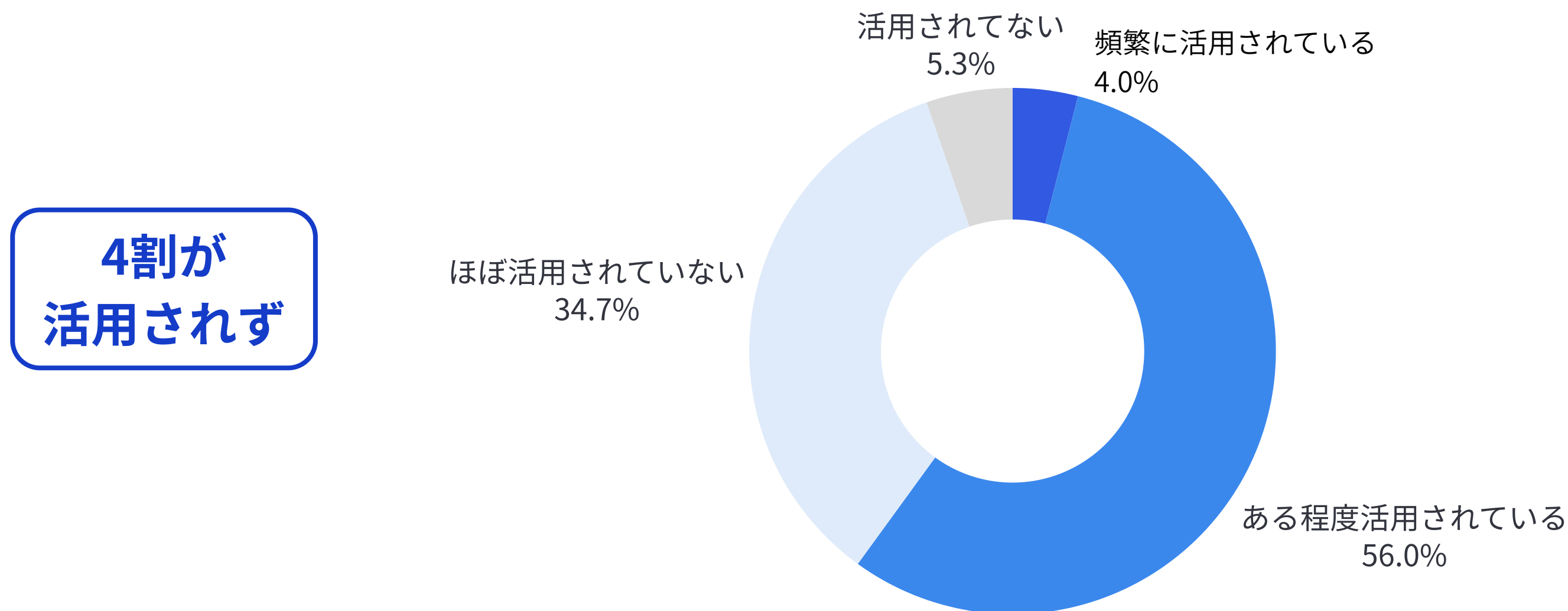
作成した報告書は、実際にどれだけ改善活動へ活かされているのか。
報告の種類別・全体での活用実態を見ていきます

4割が「ほぼ活用されていない」

作成した報告データ全体が改善活動に活用されている度合いを尋ねたところ「ほぼ活用されていない」(34.7%)「活用されていない」(5.3%)を合わせ、4割の管理職が十分に活用されていないと回答しました。

「頻繁に活用」と回答した層はわずか4.0%にとどまり、報告データが改善活動の原動力として十分に機能しきれていない実態がうかがえます。

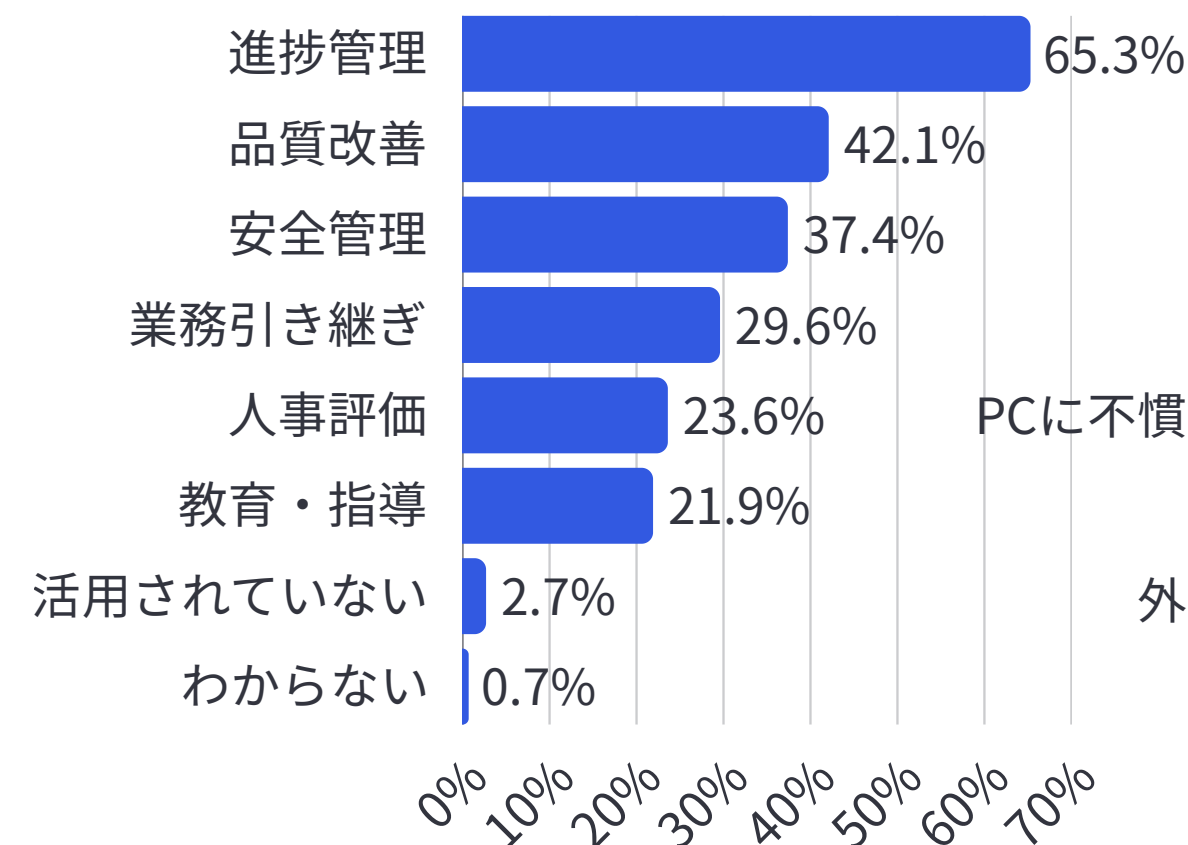
作成した報告データ全体が、実際に改善活動に活用されている度合いをお選びください (n=300)



日報の課題、5割超が「形式的」

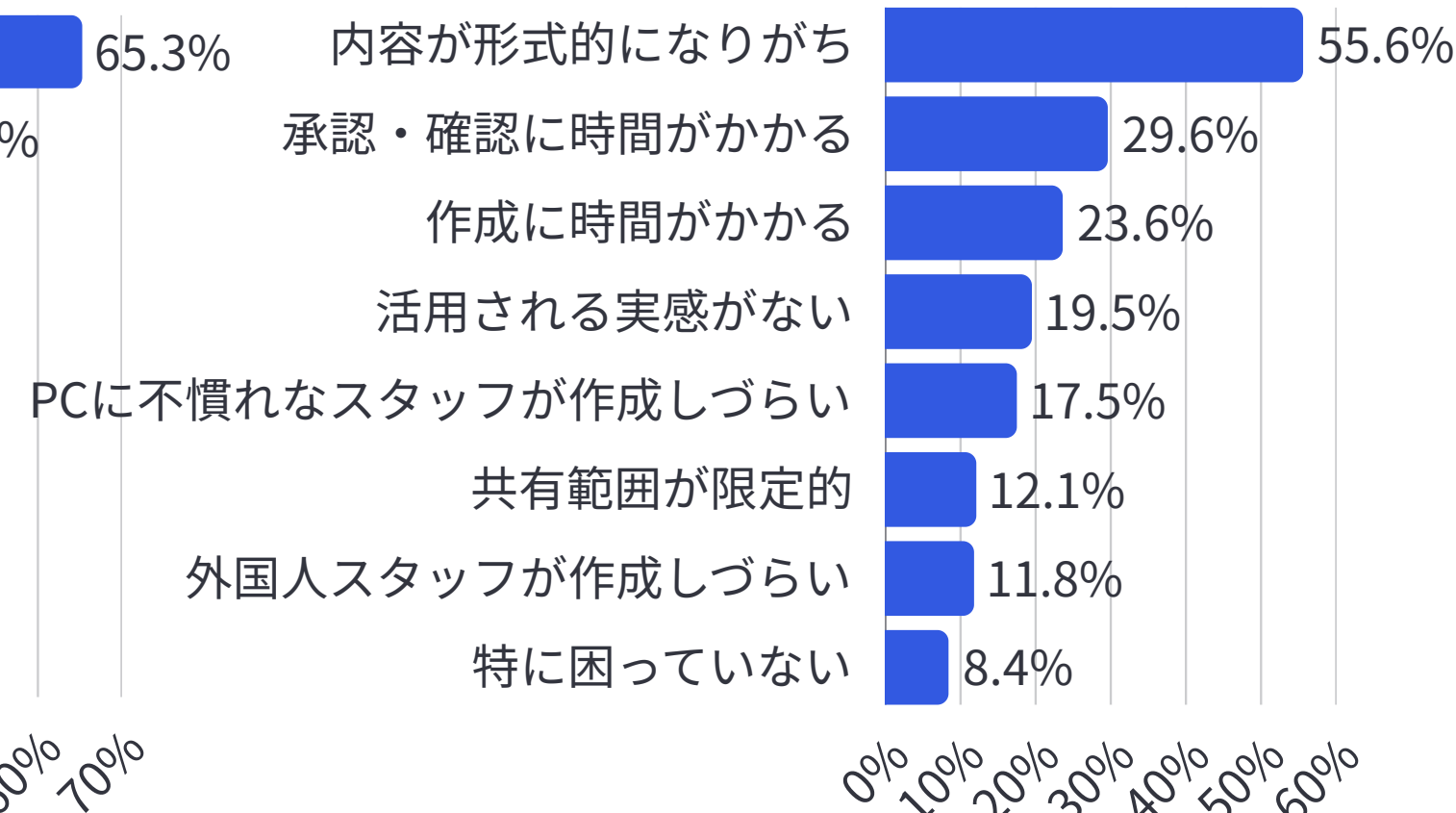
日報の活用用途は「進捗管理」(65.3%)が最多で、「品質改善」(42.1%)「安全管理」(37.4%)が続きます。一方、日報の作成・共有で困っていることは「内容が形式的になりがち」(55.6%)が最多で、「承認・確認に時間がかかる」(29.6%)が続きました。作成者層は「現場作業員(日本人)」(66.7%)が中心ですが、「現場作業員(外国人)」も12.1%の現場で日報作成に関わっています。

日報の活用用途 ※複数回答

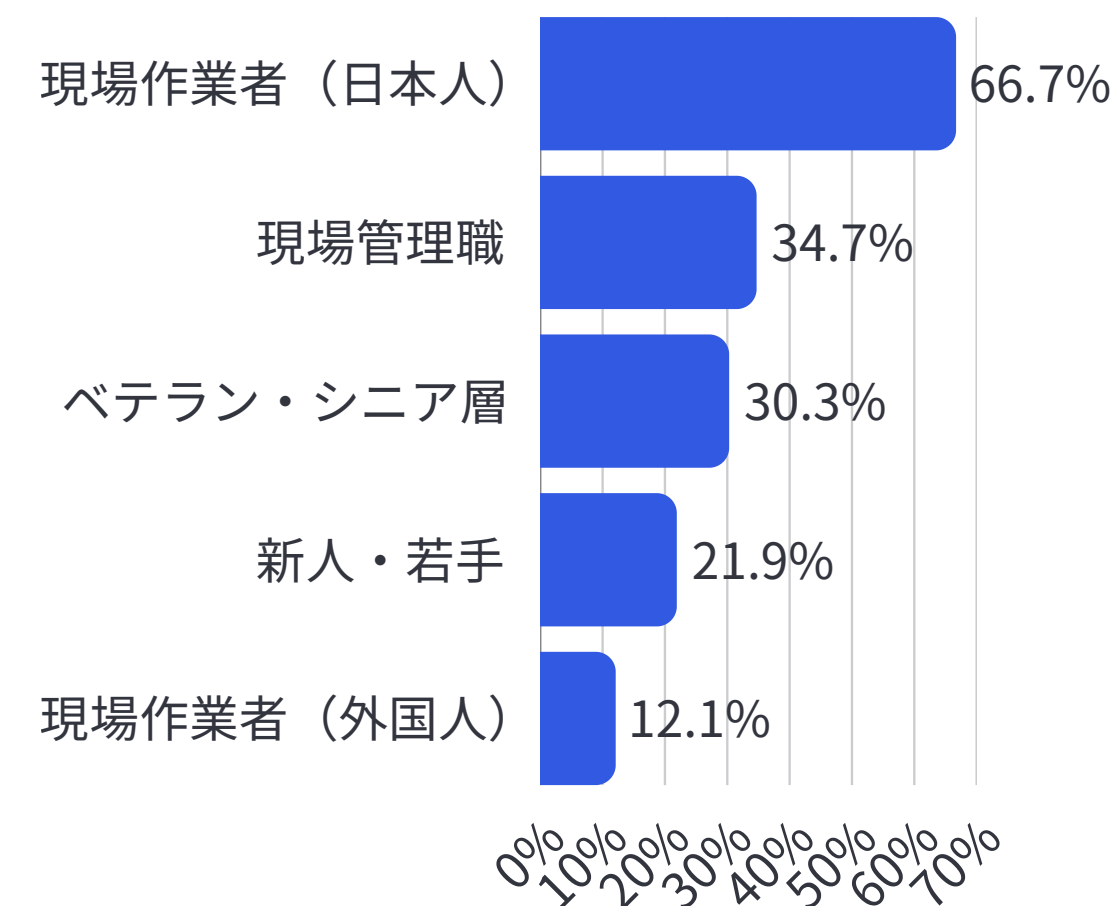


(すべてn=297)

日報の作成・共有で困っていること ※複数回答



日報の主な作成者層 ※複数回答



55.6%が
「形式的」と回答

Chapter 03

報告の形骸化

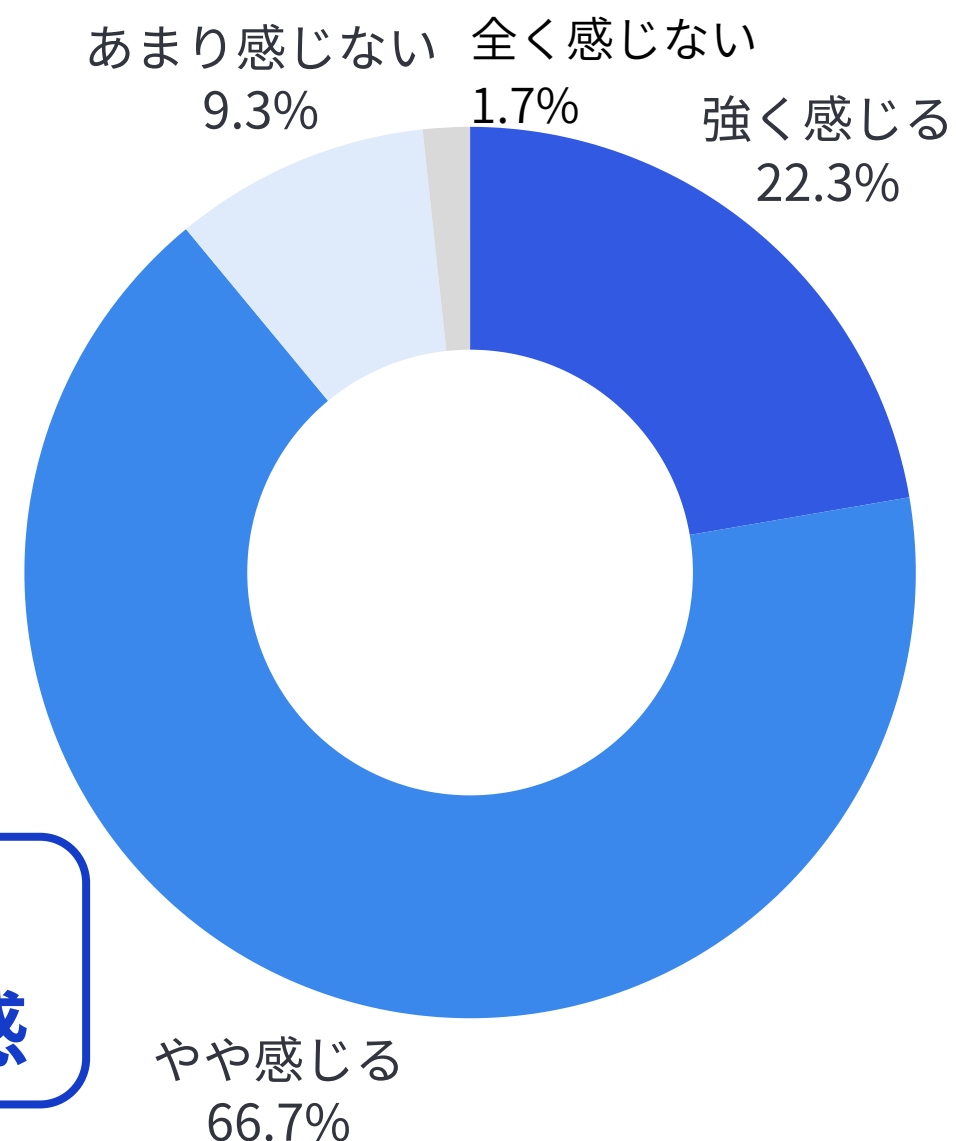


報告作業は本当に意味のあるものになっているのか。
主観・行動・時間対効果という3つの軸から、
報告の形骸化を検証します。

| 89%が報告の形骸化を実感

：「報告を出すこと自体が目的になっている」と感じるかを尋ねたところ「強く感じる」（22.3%）「やや感じる」（66.7%）を合わせ、89.0%の管理職が形骸化を実感していると回答しました。さらに「報告時間と成果のバランス」では49.7%が「見合わない」と回答し、主観・活用実態・時間対効果という異なる3つの軸すべてで、報告作業の形骸化が裏付けられる結果となりました。

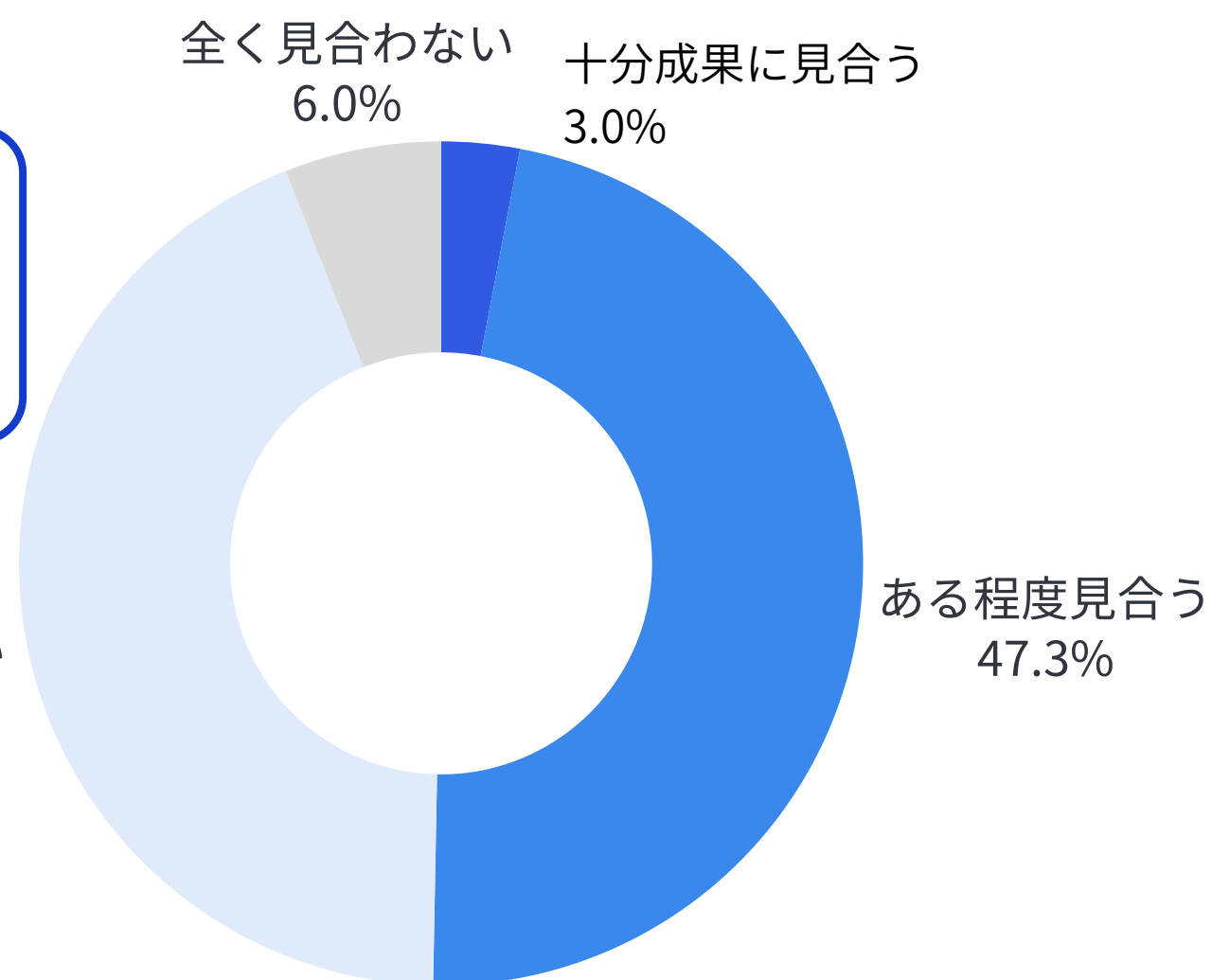
報告を「出すこと自体が目的」になっている、
形式的な作業だと感じる度合いをお選びください(n=300)



**89%が
形骸化を実感**

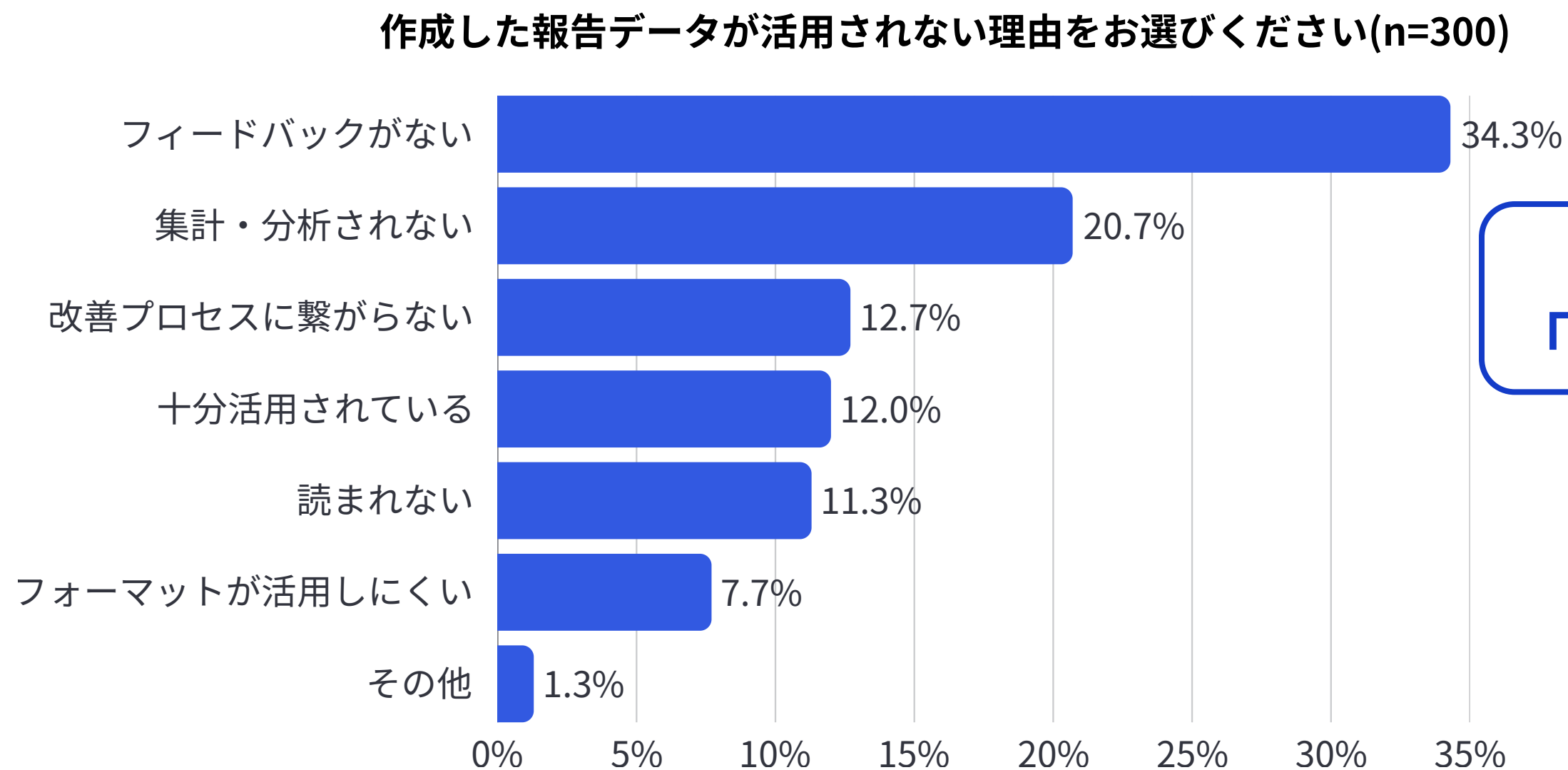
報告時間と成果のバランスについてどう思うか
(n=300)

**約半数が
成果に見合わない
と回答**



最大の理由は「フィードバックがない」こと

報告データが活用されない理由を尋ねたところ「フィードバックがない」（34.3%）が最多で、「集計・分析されない」（20.7%）「改善プロセスに繋がらない」（12.7%）が続きました。作成すること自体が目的化し、報告後の反応や現場に活用プロセスが見えていないことが、形骸化の一因となっていることがうかがえます。



**34.3%が
「フィードバックなし」**

Chapter 04

受け取る側の負担

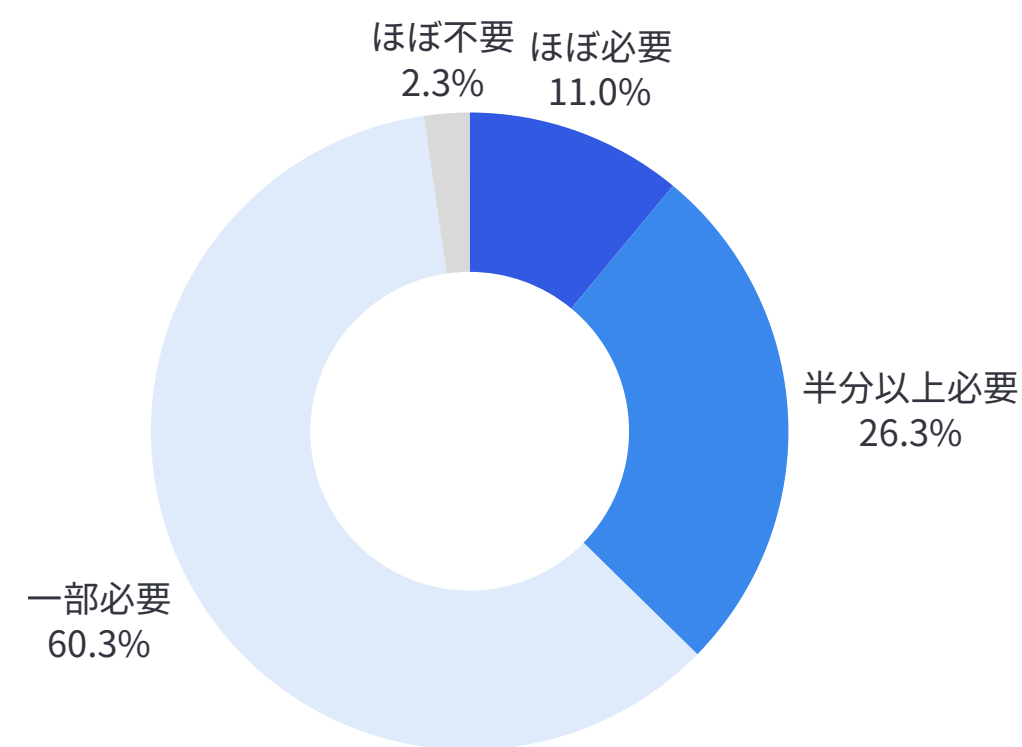


報告する側だけでなく、受け取る側にも負担があります。
現場に届く情報の「量」と「質」の実態を見ていきます。

届く情報の6割超が「自分には不要」

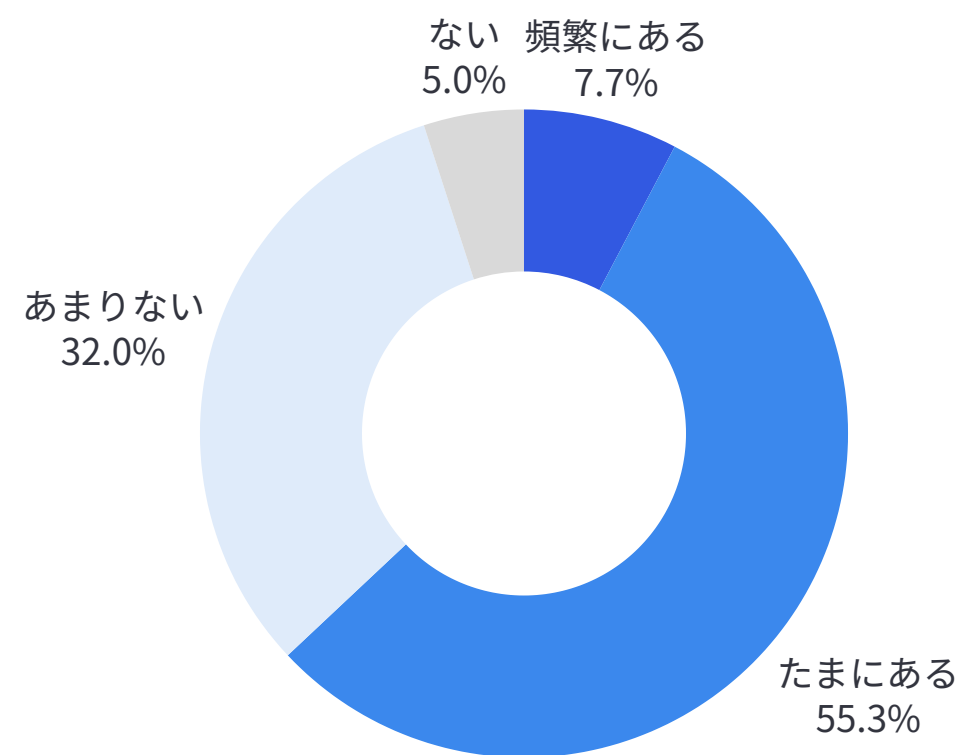
現場に届く社内情報のうち自分の業務に本当に必要な情報の割合を尋ねたところ「ほぼ不要」(2.3%)「一部必要」(60.3%)を合わせ、62.6%が「届く情報の半分に満たない部分しか自分には必要ない」と回答しました。さらに「重要情報の伝達漏れ」は「頻繁にある+たまにある」で63.0%にのぼり、情報選別に「30分以上」を費やす管理職も61.3%存在します。

現場に届く社内情報のうち、
自分の業務に本当に必要な情報の割合



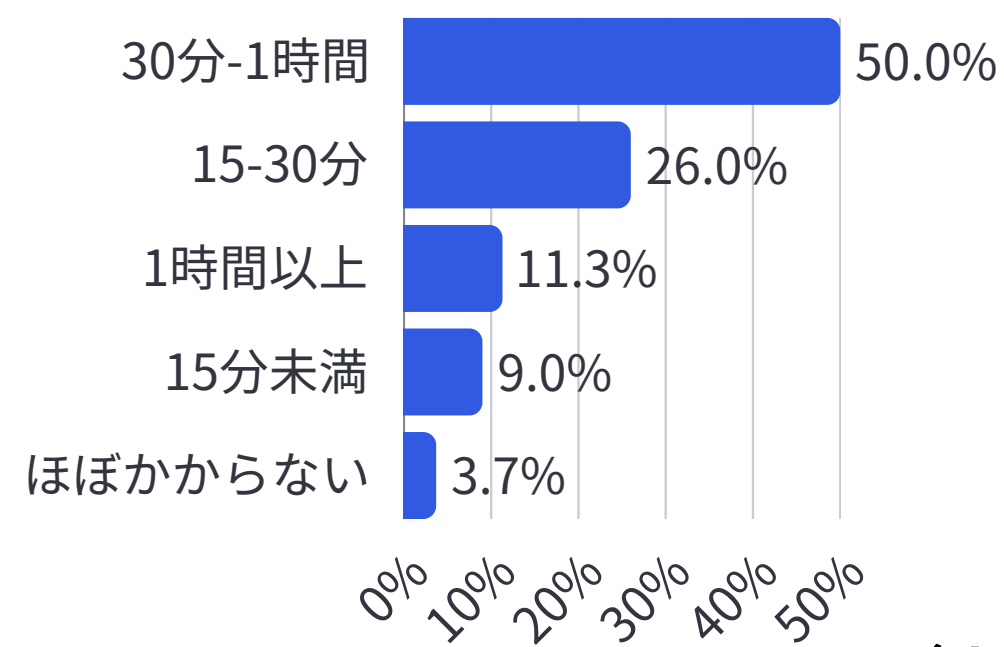
62.6%
届く情報の半分未満
しか不要

重要情報の伝達漏れはありますか



63.0%
重要情報の伝達漏れ
がある

自分に関係ある情報を社内通達・チャット等から
探し出す作業に、1日どのくらい費やしていますか



61.3%
30分以上を
費やしている

(すべてn=300)

Chapter 05

報告→改善活動への接続

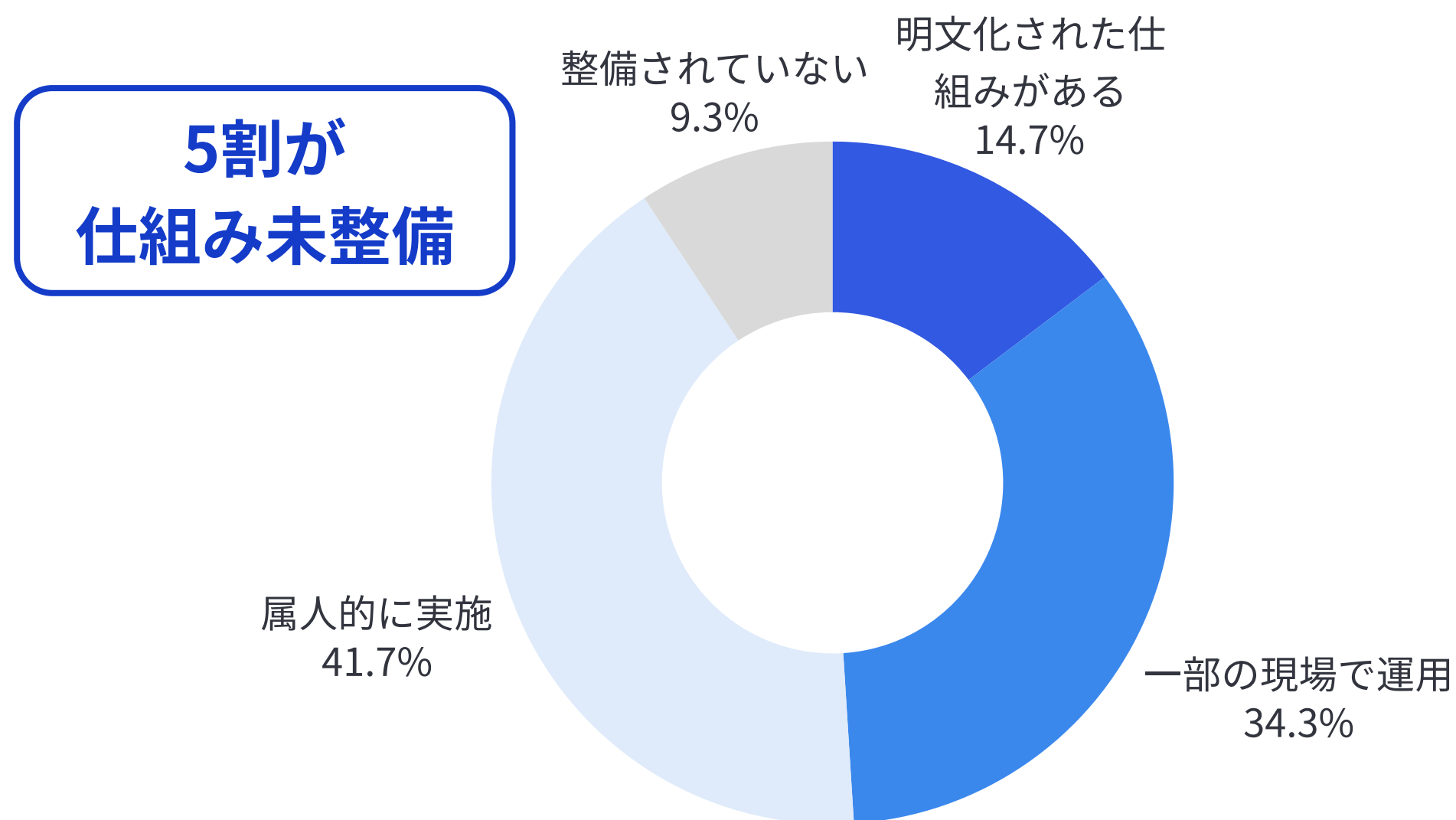


報告から改善活動への接続はどれだけスムーズなのか。
仕組みの整備状況と、実際の反映スピードの関係を
見ていきます。

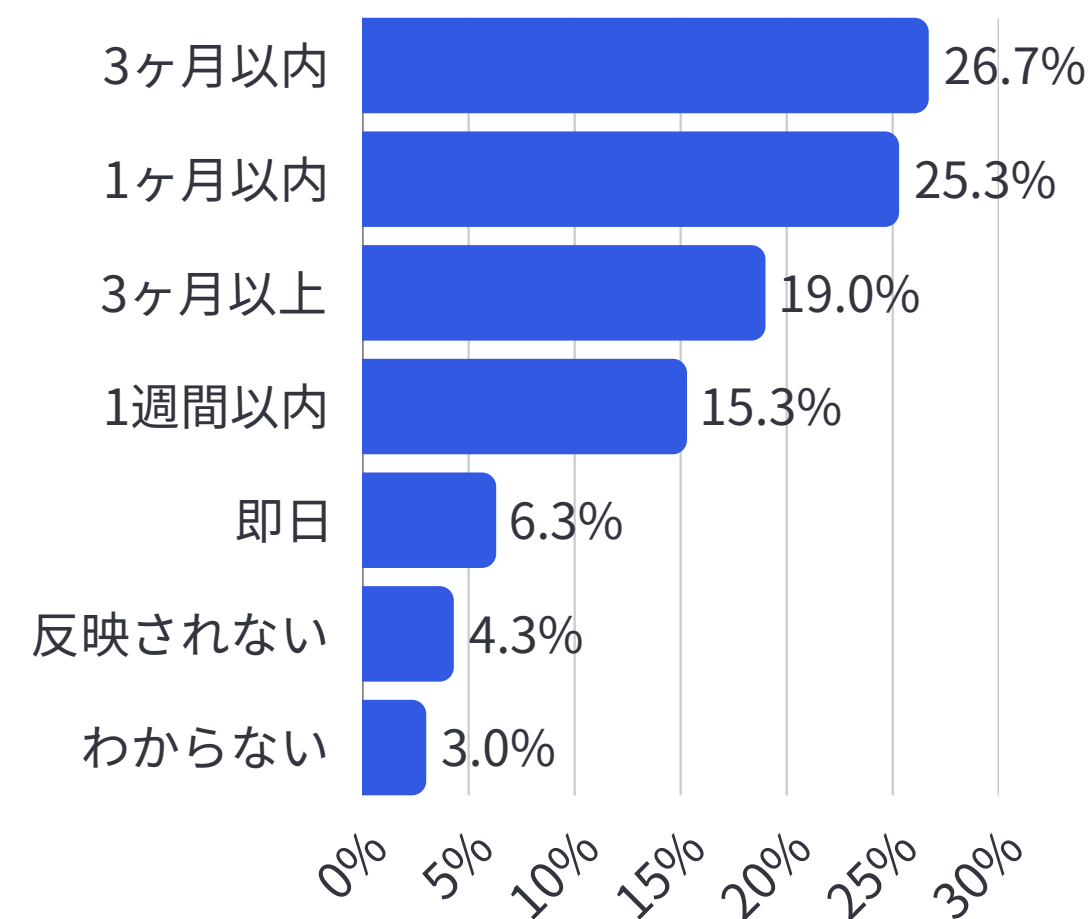
5割が仕組み未整備、改善接続弱く

報告から改善活動へ繋げる仕組みについて「整備されていない（9.3%）」「属人的に実施（41.7%）」を合わせ51.0%が明文化された仕組みを持たないと回答しました。不具合報告から手順変更までの期間は「3ヶ月以内」（26.7%）が最多で、「1ヶ月以内」（25.3%）「3ヶ月以上」（19.0%）と続き、迅速に改善へ接続できている現場は限定的であることがうかがえます。

報告から改善活動へ繋げる仕組みの整備状況をお知らせください（n=300）



不具合報告が出てから、手順変更・マニュアル更新に反映されるまでの平均期間をお選びくださいn=300)

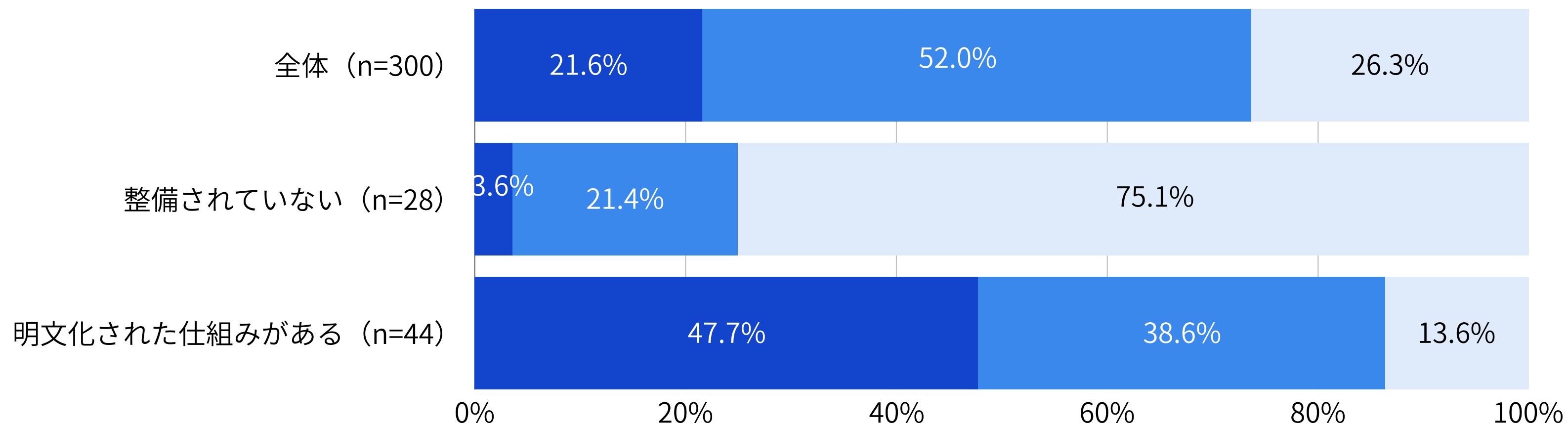


｜ 仕組みの有無が改善速度を左右する

仕組みが「整備されていない」現場では、不具合報告から手順変更までに「3ヶ月以上」（28.6%）「反映されない」（28.6%）が過半数を占める一方、「明文化された仕組みがある」現場では「即日～1週間以内」の合計が47.7%に達しました。仕組みの有無が改善スピードを大きく左右することが分かります。

報告から改善活動へ繋げる仕組みの整備状況×改善反映期間のクロス集計（n=300）

● 早い（即日～1週間以内） ● 中間（1ヶ月～3ヶ月以内） ● 遅い（3ヶ月以上・反映されない・わからない）



Chapter 06

多言語コミュニケーション

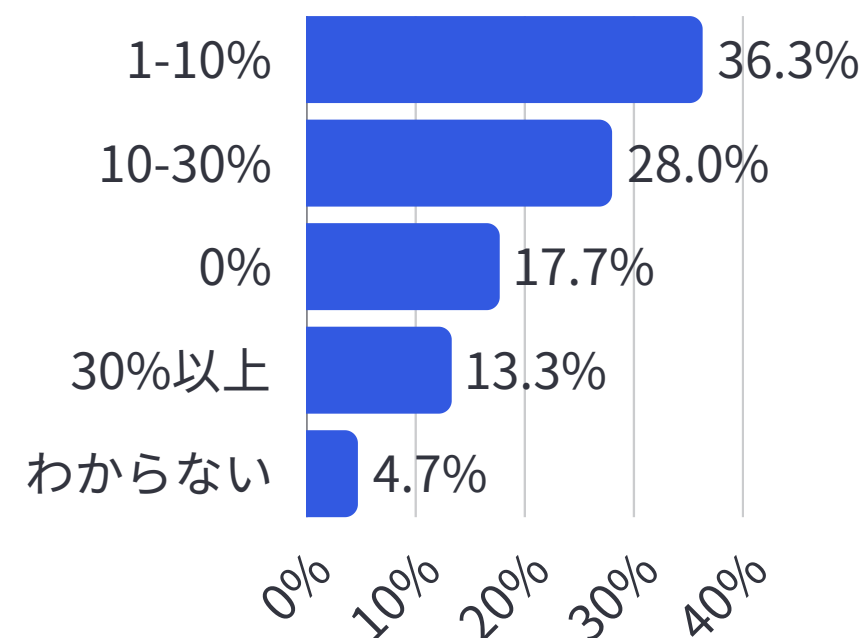


外国人労働者比率が高まる中、
報告業務における多言語対応のニーズはどの程度あるのか
見ていきます。

外国人比率上昇で多言語ニーズも増加

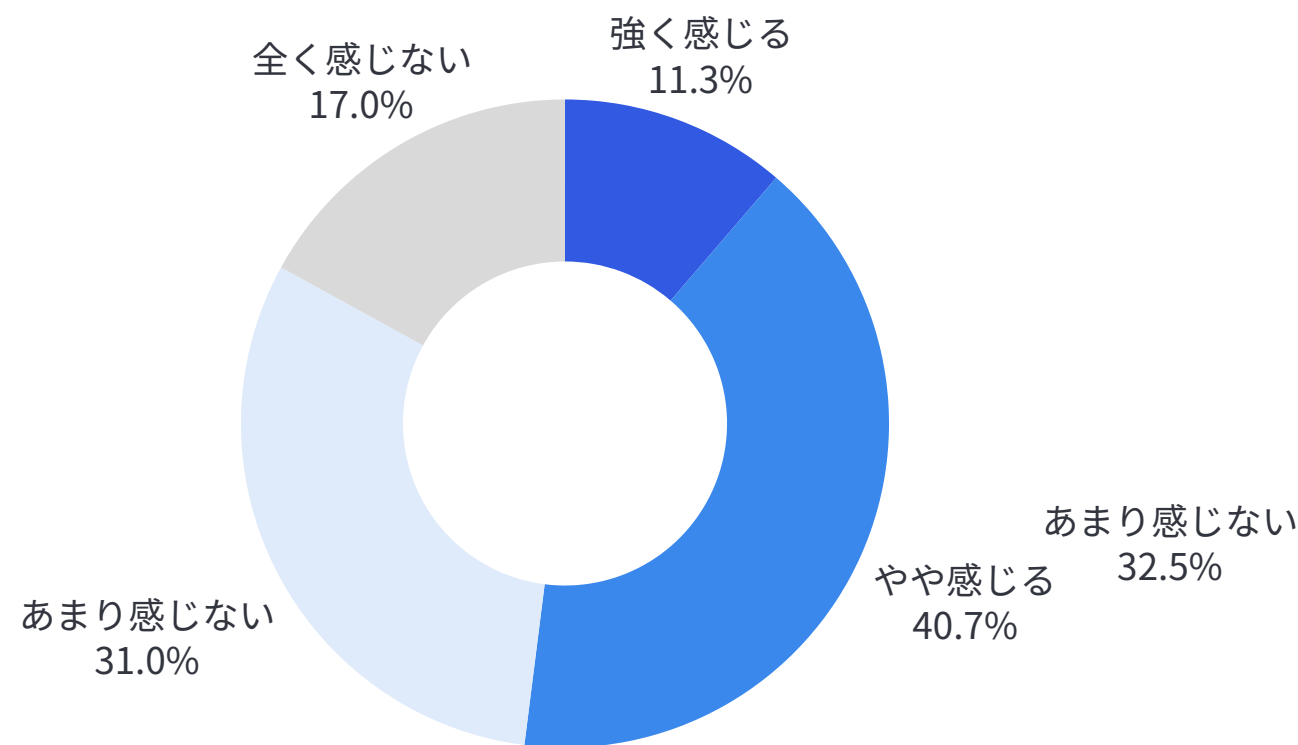
現場の外国人労働者比率は「1-10%」（36.3%）が最多ですが、「10-30%」「30%以上」を合わせると41.3%の現場に一定以上の外国人材が在籍しています。多言語対応の必要性について、外国人比率が「30%以上」の現場に限ると「強く感じる＋やや感じる」の合計が55.0%となり、全体平均（52.0%）をやや上回りました。また、日報作成者に外国人スタッフが含まれる現場は12.1%存在します。

現場の外国人材比率をお知らせください（n=300）



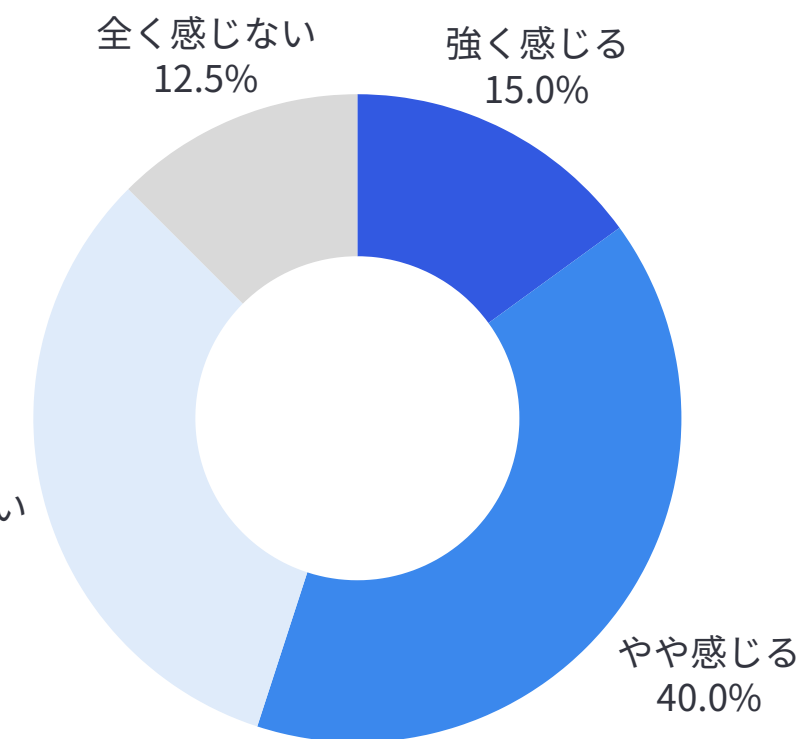
41.3%
一定以上の外国人材が存在

報告の多言語対応の必要性を感じますか（n=300）



52.0%
必要性を感じる

外国人労働者比率「30%以上」の現場のみでの報告の多言語対応の必要性（n=40）



55.0%
必要性を感じる

おわりに

報告は「出す」ためのものではなく、 「活かす」ためのものである

本調査から、製造業の現場では平均3種類以上の報告書が日常的に作成され、1日あたり約43分がその作成に費やされている実態が明らかになりました。

しかし作成された報告データの4割は十分に活用されておらず、89%の管理職が報告作業の形骸化を実感しています。

さらに情報を受け取る側も「届く情報の6割が自分には不要」と感じるなど、発信・受信の両面に課題を抱えていることがわかりました。

仕組みが整備されていない現場ほど、不具合報告から手順変更までの反映が長期化する傾向も確認され、『報告する』ところまでは進んでも、その先の『変える』にうまくつながっていない現場が多いことが見えてきます。

報告を「出すこと」自体を目的化させず、確実に「活かす」仕組みへと転換していくことが、製造業の現場改善において重要になるのではないのでしょうか。